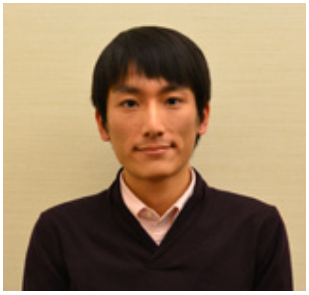
TEI鼎談DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

東京大学 法学部

法学部では、法学と政治学とが対をなすものとして教育しており、学生には法的思考や政治学的識見の基礎の修得を期待します。法律家を目指す学生についても、狭い意味での法学のみを学習させることは法学部の教育の目指すところではありません。





■大学生
秦佑輔さん



■先生
苅部直先生



■卒業生
小野田真実さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

法学部ではどのようなことを学ぶのか、教えていただけますか。



■先生
何しろ名前が「法」学部ですから、ひたすら法律の専門家になるための勉強だけをするところと思われがちなのですが、実際には法と政治の二つを中心にして、社会で活躍するための教養を広く培う学部と考えた方がいいですね。将来どんな職場で働くにせよ、そこで指導的な仕事をするためには、法と政治に関するセンスが不可欠ですから。卒業後の進路も、弁護士・検事・裁判官といった法曹のみにかぎりません。中央省庁や地方自治体の公務員になる人も伝統的に多いですし、数の上では大半が民間企業に就職しています。もちろん大学院へ進む人もいる。

■大学生
先生がおっしゃったように、法律だけを学ぶところではないですね。私も、統計などを用いて政治の実証分析を行うゼミに参加していましたし、受講した講義は法律よりも政治の講義の方が多いくらいです。

■卒業生
私も、法律の専門家になるために法学部に、という意識はありませんでした。自分が生きているこの社会にあり、規範となっている「法」についての理解を深めるのが目的でしたから。

■先生
法学部の授業のうちには、いろいろなものがありますね。法学と政治学を二つの焦点として、実務に直結するような分野から、思想や歴史の観点を掘り下げる法哲学や政治外交史まで、実にさまざまです。外国の現実政治や法文化についての科目も多い。

その中で東大法学部の特徴はどんなことでしょうか。

■先生
ゼミのあり方が独特です。ほかの大学では３・４年次の２年間を通じて一つのゼミに所属する場合が多いですが、東大では半年で終わるのが基本。一つの分野についてのみ専門知識を深めるよりも、２年間で最大４つの分野の知的訓練にふれることで、教養の幅を広げてもらおうというねらいです。「広く浅く」ではなくて、複数のゼミに出ることで「広く深く」勉強できると言ってもいいかな。

■大学生
１・２年生向けのゼミも開講されています。私はそこで初めて先生の講義を受けました。

■卒業生
私は大学生活の後半で先生のゼミに参加しました。開講される時期ごとにゼミの内容も変わるので、履修してきた講義や、自分の興味などに合わせてゼミを選ぶことができますね。

■先生
教員によっては、通年で行うゼミや、卒業生とのつながりが強いゼミもありますね。少数ですがゼミ論文を書かせる場合もあります。ただ現在までの制度では、法学部でこれを特に学んで卒業したという実感がどうしても薄くなりがちです。それを改善するために、希望する人にはリサーチ・ペーパーを書いて卒業してもらう制度を検討しているところです。それがあれば、一つのテーマについて現在よりも集中的に学びながら、自分自身の関心を形にできるでしょうね。

先生の研究内容について教えてください。

■先生

日本政治思想史を専門にしています。過去の「日本人」が「政治」に関してどのように考えてきたのかをたどることを通じて、われわれ自身の「政治」についても考える学問です。したがって対象としては古代から現代まで、日本の思想史の全体が入る可能性がありますが、さしあたりいま書いている本は 19 世紀、徳川時代の後半から明治時代までの時期を扱っています。これを近世と近代という具合にわけずに、徳川時代に儒学を学んでいた人々が、「開国」のなかでどのように西洋思想を受容したのか、その過程に注目しようというねらいです。
たとえば、われわれがいま、政治を語るとき普通に使っている「自由」も「権利」も「民主主義」も、もともと前近代の日本にはなかった言葉で、西洋から輸入した liberty、right、democracy といった言葉を漢字熟語で訳したものです。また「権利」はもともと存在しなかった漢字熟語を、明治初期の日本で新たに作ったもの。「自由」「民主」は中国古典にもある言葉ですが、それぞれの意味を微妙に変えながら訳語として用いています。つまり 19 世紀の日本の人々にとっては、西洋思想のさまざまな言葉を日本語でどう表現するかを考える過程それ自体が、独自の思想の営みだった。
思想史研究の方法を用いてそうした営みを追体験することで、いろいろなことがわかります。いまわれわれが「民主」と普通に使っている言葉も、前近代ではまったく異なる意味で用いられていたこと。right の訳語を考える過程で、さまざまな候補が考えられていたこと。あるいは、こうした訳語のすべてが、西洋で本来用いられていた意味とはずれている可能性。そうした考察を通じて、現代人自身の政治観も豊かになると思うんですね。

では、お二人が東京大学法学部に入学した理由について教えてください。

■卒業生



法律への興味がまずありました。それは法律を使おうという実学的なことへの興味ではなく、「法律ってなんだ？」という概念的な考え方への興味でした。「社会ってなんだろう？それを動かしている、政治ってなんだろう？」という疑問から。そこから法律へとたどり着きました。就職に役立つかどうかは頭になく、とにかく法律を学べる分野を勉強したい。
政治学の中にもデータを重視する政治学などいろいろな分野がありますが、その中でも思想の部分を学びたいと考えました。きっかけは先ほど先生がおっしゃったような疑問。普段何気なく、あたりまえに使っている言葉に「これは本来、なにを意味しているんだろう」と疑問を感じたことです。わかったふりをして使い続けることもできますが、世の中にはこだわって、そこにある思想などについて考え続けている人がいる。私はそちら側の人間になりたいと思いました。言葉の本来の意味、そこにある思想を理解してはじめて、実学につながるんじゃないかと考えたんです。

■大学生

私が東大法学部を選んだ理由は、さまざまな内容を学問の対象にしている政治学を学ぶことで、世の中のことがより分かるようになるのではないか、と考えたからです。

■先生

法と政治は、それぞれの人が卒業後に社会とかかわってゆく、知恵の入口のようなものなんですね。そこから始まって、実生活のなかで知見を広げてゆくという…。

■大学生
でも、勉強すればするほど、わからなくなってます。先生のゼミでとても印象に強く残っているのは、初回でおっしゃった「わかったつもりになっている政治が、わからなくなることをめざす」という言葉です。

■卒業生
私も卒業して何年も経ちますが、いまだに考えれば考えるほどわからないことが増えていきます。この「わからない」ことが全て解消されることはないでしょうね。

■先生
そういう風に思うようになることが、まさに法学部の教育のねらいなんですよ（笑）。まだわからないことがあると気づいて、これは何だろうと追究することで、自分の世界が広がるわけですから。これは一生続く営みで、その大切さを大学時代に実感することが重要。

■大学生
先生のゼミを通して、学ぶことの大切さを知る一方で、わからないことを受け入れることもできるようになりました。高校時代は、答がでないもの、わからないままのことは、とてもいやだった。でも、大学で学ぶ中で「わからないことはあっていいんだ」と思えるようになりました。

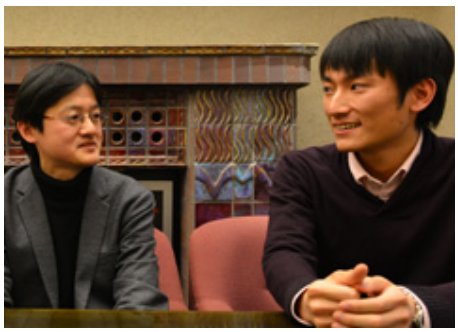
■卒業生
それがモチベーションにつながることもありますよね。

法学部での勉強は社会に出てこそ、人生の役に立つといえますね。

■先生
大学受験までは、常に自分の先に上の学校の入学試験があって、それを一つ一つこえてゆくという人生イメージをもっている人が多い。でも、大学もしくは大学院を出て、社会に出たあとはまったく違うんですよね。予想もしなかった困難にぶつかって、それを解決しようと頭を悩ませることが多いですし、人から教えられるだけでなく、自分からほかの人に助言をする必要もある。法学・政治学を学ぶことを通じてその予備訓練をやるのが、法学部での勉強なのだと思います。

●大学生活について

東京大学法学部での学生生活について教えてください。



■先生
ゼミがだいたい半年で終わりますから、所属ゼミを単位として学生集団がわかれるということがない。１学年 400 人がすべて同級生という形です。それでも強いていえば、１・２年次の第二外国語のクラスが基礎的な所属団体のようになっていますね。

■大学生
同じサークルに所属している者同士は結びつきが強いですね。それと公務員を目指している学生とは試験について情報交換をしたりしているので、連帯感はありますね。

■先生
中央省庁への就職案内については、学生による緑会委員会が企画する講演会も例年ありますね。他学部のゼミに出て、いろいろな専門の人と交流する場合もあるでしょう。

■大学生
それと私は図書館でアルバイトをしていて、そこでも知り合いができたりしました。

■卒業生
私は在学中、飲食店でアルバイトをしていました。「接客業を経験できるのはいましかない」と思い、チャレンジしました。学校とはまた違った人間関係も築け、楽しい思い出になりましたね。

大学の近くに住んでいる学生さんが多いのですか？

■卒業生
私は１・２年は三鷹、３・４年はキャンパスにも近い白山に住んでいました。浪人も経験しているのですが、浪人時代は地方から東京に出てきて、友人の家で暮らしていました。大学に入学してからは一人暮らしをしていました。

■大学生
私は自宅から通っています。キャンパスのある本郷のあたりはいわゆる「学生街」という感じはありませんね。

授業やゼミについて、どのような活動を行うのか教えてください。

■先生
私の学部３・４年生向けのゼミに関していうと、政治思想について語られた重要な本を読んだ上で、おたがいに議論する形です。テーマは毎年変わりますが、毎週、報告者を決めて、担当箇所について

その内容解説と研究発表をやってもらい、それに基づいてみんなで議論する。1・2年生のゼミ（法学部駒場演習）、3・4年のゼミ、大学院演習と、そこで行う読解の精度はそれぞれ異なるのですが、進め方はほとんど同じ。

■卒業生
そうですね。先生のゼミでは、課題の本が一冊選ばれます。最初の授業で発表を担当する章が決まりますから、そこに向けてその章を読解し、資料集めを始めます。私が参加したゼミの課題の本は、ジュディス・N・シュクラーの『Ordinary Vices』という英語の研究書。訳すと『日常の悪徳』でしょうか。政治思想について、その本が書かれた当時の時代背景や思想について、そして英語について完璧に理解することが求められました。先ほどの話題でもありましたが、「liberty」という単語が出てきたら、これは「どんな」「誰のための」自由かを考えなければなりません。当然、担当の章だけでは不十分ですから、研究書全体に書かれている内容、筆者の考え方などまで理解する必要があります。ゼミ発表では、4年生や院生から質問が矢のように飛んできます。どんな質問が来ても、根拠ある回答をするためには、本当にしっかり準備して臨まないといけませんでした。とても苦労した記憶があります（苦笑）。

■先生
その年のシュクラーの本はほんとうに難物でした（笑）。それでも頑張ってくれたのはうれしかったですし、こちらもゼミの参加者からいろいろ教えられた気がします。

■卒業生
文字面だけを読むのではなく、自分で調べて、深く理解するというのは、その後の研究や思考の訓練になり、いまの仕事にも生きています。院生からの質問や指摘も鋭く、「こういう視点もあるんだな」「こんな著作もあるんだ」という驚きや発見があり、自分の視野を広げることができましたね。時に嘘や悪、裏切りがテーマとなっていることもあり、ヨーロッパの人たちがそれらについてどのように考えてきたのかということを深く考える一方で、「個人の力ではどうしようもない悪に直面したとき、どう対処するのか」と自分の身に置き換えて考えることも多く、社会に出るための心構えというのができたと思います。また、「誰しもが悪いことをしてしまうことがある。それはどこまで許されるのか」という政治思想の根本問題について考えることは、どんな仕事にも生きてくる貴重な経験だったと思います。

■大学生
私は、先ほども話したように、先生のゼミに入って学んだことで、いろいろなことがわからなくなりました（笑）。高校生の時は、「わからないことをわかるようにしてやろう」とばかり考えていましたが、いまはわからないことが楽しくなってきました。先生の「政治がわからなくなることを目指す」という言葉が、最初は「おもしろいことをいう先生だな」というへーっというただの感想だったのが、ゼミを通して腑に落ちてきたところです。その後、先生のお話を聞いたり、こうしてお会いしたりするたびに、わからないことがどんどん増えていくような気がします（笑）。

■卒業生

世の中にあるものって、表面だけを追っていることがあります。私の就いている記者という仕事では、ささいな言葉でも、その裏側の真意までしっかり考えないといけません。「民主主義というが、誰のための民主主義か」とは先生のゼミで考えるようになったことですが、なににおいても「誰にとって」「どんなもののため」と考えることで、物事の真意を深く追求できるようになったと思います。

■先生



大学の４年間は、それまでの自分の考え方をリセットすることが大事なんですよね。自分の考えとか世の中の常識とかを、いったん脇におきながら、ほかの考え方を理解するように努めること。政治思想史のゼミなどはそれを自覚的にやっている方ですが、大学での授業一般がそういう思考訓練の場とも言えるでしょう。その４年間の蓄積が、社会で生きていくための基礎になる。成功や出世にじかに結びつくものではありませんけどね（笑）。

■卒業生

いまでも学生時代の仲間と会うと、いろいろなことについて語り合います。時事的なことから、学問的な会話まで。大学の仲間とは、在学中からそういったトピックについて話し、議論する機会が多かったですね。それが今も刺激になっていますし、新たな視点に気づかされる貴重な瞬間となっています。そういう人に出会えることも、この大学、学部の特徴だと思います。惜しげもなく自分の主張や思考について話せる人間関係って、社会人同士ではなかなか築けないんですよ。大学は貴重な出会いの場でもありますね。

●就職活動、仕事について

では、現在就かれているお仕事について詳しく聞かせてください。

■卒業生

私は通信社で記者をしています。現在は福島県で、時事的な事件・事故の取材はもちろん、東日本大震災後の状況や原発周辺に暮らす人たちに話を聞いて回っています。

就職活動はどのように進められたのですか？

■卒業生

学生時代、周りが就活を始め、内定を取るようになっても「この仕事に就きたい」という明確なイメージが描けずにいました。自分が社会とどのように関わりを持つべきかということで、迷っていたのです。その時に思い出したのが、政治家のインターンをしていた経験です。その期間中に政治部の記者と交流を持つ機会があり、いろいろな話を聞く中で「こういう仕事をして、こういうことを考えてい

る人がいるんだ」と興味を持ったのです。特に、社会を揺るがすような事件が動いている瞬間に立ち会って目の当たりにし、それを咀嚼して自分の言葉で伝えるという仕事には魅力を感じました。それまでマスコミ対策などはしてこなかったのですが「チャレンジしよう！」と就活を始め、いまの会社に勤めることになりました。
働き始めてみると、思った以上に体力のいる仕事でしたね。時には長靴にジャンパーで、泥臭い取材をして記事を書いています。
それでもやはり、ニュースが動く最前線にいるのだ、という実感はたまらなく刺激的ですね。自分が取材し、記事を書いていることが、「このとき、この局面が 10 年後 20 年後を方向づけるかもしれない」と思うとなおさらです。
東日本大震災の被災地では、住民の方とお話しをすることで、「政治が決定したことがこうやって姿形を成すのだな」と肌で感じることができます。発表や報道で見たり、知ったことが、実際にはどのように実行されて、住民の方にどう受け取られているかを、自分の目と耳で知ることで「こういう考え方があるのか」「社会は広いな」と気付かされることばかりです。これから東京オリンピックの準備が進む中で、被災地と復興はどう姿を変えていくのか。それを現場の最前線で追えるということに、やりがいと責任を感じています。

秦さんも就職が決まっていらっしゃいますね。

■大学生
はい。国家公務員として来春から働くことになります。法学部で学ぶなかで、実際に社会制度を作ることで社会に貢献したいという思いを強くしましたが、その一歩が踏み出せたと感じています。さらに来春以降もしっかりと歩めるように、現在はいろいろな講義を受けたり、経験をしたりと、知識と経験の幅を広げ、深めようとしています。

■先生
あとは卒業前の試験で単位を落とさないことが大事ですね（笑）。

● 5 年後に向けて

5年後に皆さんはなにをしているでしょうか？

■卒業生
記者の仕事は、なにか一つの答えが見つかる仕事ではないので、はっきりとはいえませんが、自分の仕事に誇りを持って働いていたいと思いますね。私の記事を読んだ人に、なにかを考えるきっかけを提供できれば幸いです。そういう人をひとりでも増やせるよう、複雑な事象をわかりやすく紐解いて、歪まない形で世の中に伝えていきたいですね。

■大学生

5年後は2020年、オリンピックイヤーですね。官公庁に勤める人間として、2020年はさまざまなところでターゲットイヤーになっているので、私の社会人人生にとっても一つの節目になるのではないかと考えています。社会人としての責任も発生する年次だと思いますので、それ相応のポジションにいたいですね。そのためにも仕事における知識をどん欲に吸収し、技術をしっかりと培いたい。それは大変な時間になるとは思いますが、頑張りたいと思っています。

■先生
5年後、私はすでに初老です。かつての大物芸能人のように、早々と引退して海外で別荘暮らしというのが理想ですが、そうはならないでしょうね（笑）。ただ、先ほども申しあげたリサーチ・ペーパーの導入などのカリキュラム改革が順調に進めば、５年後にはすでに定着していることになります。東大はしっかりと勉強する学生が多いのが特徴ですから、おもしろい論文が出てくるのではと期待しています。もちろん、われわれ教員もしっかりとアドヴァイスしないといけないのですが。

●高校生へのアドバイス

高校生へのメッセージをお願いします。

■先生
大学教員としては、高校の各科目の知識を、決して受験科目だけにかぎらず、幅広く身につけてほしいのが第一なんですね。とくに世界史と日本史です。実はこの二つは大学に入ってから体系的に学ぶことができませんし、法学や政治学の授業も、歴史の流れを知った上で聴くことで、内容を体系的に理解できるようになりますから。
そして、いろいろな勉強をするなかで、自分が何に関心をもっているのかを自覚することが大事ですが、その上でさらに、他人の興味に興味をもってほしいと思います。「あいつは変なことが好きだな」と思ってすませるのでなく、「そんなに好きなら、自分もそれをちょっと覗いてみよう」という好奇心をもって、その友達が好きな本や音楽やアニメにふれてみること。そういう習慣がつくことで、自分の枠から出て、多様な考えを理解する姿勢ができてくるのだと思います。
これは、進路選択をどうやって決めるかにも関係するんですよね。自分であれこれ考えて大学情報を集めているだけでは、自分の気持ちもよくわからないままにとどまってしまう。そこで大事なのは、実際に大学に進んでいる先輩たちや、自分の親の体験談を聞くことでしょう。そういう人たちが何を考えてその大学を選んだのか、入学してどんなことを学び、どんな風に遊んでいるか。そういう話をいくつも聞いているうちに、それなら自分はこうしようという方向が見えてくるのだと思いますよ。

■卒業生
私は大学で学ぶ中で、先生や友人をはじめ、たくさんの人と知り合う機会に恵まれました。大学は自分の人生での考え方のベースが培われるところでもあると思います。浪人も経験しているので、試験勉強は孤独で、退屈で、厳しくつらいこともありました。でも、今振り返ってみると、それはすべて

過ぎたこと。その日々も、苦労も無駄じゃなかったな、と思います。合格はゴールでも目的でもなくて、大学の楽しい授業を聞くための勉強だと思うと、意外と肩の力を抜いてできるんじゃないかなと思います。
また、もし地方にいて閉塞感を感じている、そこを抜け出したいけれど迷っているという人には、ぜひ勇気を持って挑戦して欲しいですね。私はおかげで恵まれた大学生活を過ごせたと、胸を張っていえますから。



■大学生
私が法学部を選んだのは、高校時代にお世話になった先生方の影響もあるかもしれません。高校時代に少ないながらも、自分に刺激を与えてくれる大人と関わる機会を持てたことで、人生の進路が決まったといえます。学生時代は、どうしても学校の同学年、同年代とのつきあいばかりになってしまいますが、私はもっとたくさんの大人と関われればよかったなと思っています。そうすれば、また違った視点、影響を受けたかもしれませんから。
あとは、高校生には、受験勉強を始める前になにかに打ち込むという経験をして欲しいなと思います。私は中高一貫校で、６年間同じ部活に打ち込みました。直接、なにかが生きているというわけではないですが、なにかやり抜くこと、やりきったという感覚は、今なにかに取り組む時に活かされていますし、自信にもなっています。部活に限りませんが、なにか一つでも打ち込んだものを持っておくと、後々自信につながると思いますよ。

■先生
手前味噌になりますが…法学部に興味を持っている方には、私の書いた政治学の入門書、『ヒューマニティーズ 政治学』をおすすめしたいと思います。

■大学生
私も読みました。駒場の先生のゼミでお聞きしたようなお話がたくさん載っていて、とても楽しく読ませていただきました。この本は政治学の基本が解きほぐして解説されているので、入門書として最適ですね。中でもブックリストは参考になります。順番に読んでいますが、面白く読みながら、勉強できています。友人にも勧めているくらいですよ。

■先生
ありがとう（笑）。

■卒業生
私も読んでみようかな。社会人になって、自分のための本を読む時間ってずいぶん減りました。どこか仕事のためになる本を選んでしまいますし、なにより忙しさもあって自分の時間を作ること自体が難しかったりしますね。

■先生

仕事をするようになると、時間があったとしても、純粋に楽しみで本を読むということがどうしても減りますね。秦さんも来春から忙しくなりますよ。

■大学生
大学生も、高校生に同じことをいうかも知れないですね（笑）。高校時代の貴重な時間を、しっかりと自分のために使って欲しいですね。

※内容は 2015 年 1 月当時のものです。

●インタビューに答えてくれた方々



■先生
苅部直先生



■卒業生
小野田真実さん



■大学生
秦佑輔さん